「１２月１日」

2009/12/01

「……あーあー……」

通話の途切れたケータイを片手に、思わず頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。

「せっかく、せっかくデートだったのに……」

私がいるのは大学だった。大学って言っても私の通っているところではない。だからここには妹子はいない。一緒にいるのは芭蕉さんだ。

会議とか何とか。手伝いを頼まれて私がついていくことになった。

本当は、今夜はデートのはずだった。妹子と。

渋る妹子をなんとかなだめてお願いし倒して、どうにか取り付けた約束だったのに。

今日遅くなりそうだよごめんねなんて、芭蕉さんの言葉がこれほど鬼のように感じたのも初めてだろう。

あんなにお願いしたのに、仕方ないとはいえ私の方から断りの電話を入れなきゃいけないことも相当堪えた。

しかも今日、今日だからこそ意味があったのだから、なおさらだ。

「……あーあ」

今日は、妹子と付き合い初めてからちょうど一ヶ月だった。

だから、いっしょにいたかったのに。

そもそも今日のデートの誘いをしたときに思いっ切り渋られたことにも、今の電話にそうですか、と大した反応もなく了解されてしまったことにも、正直ものすごくしょんぼりしていた。

気付いてないのだろうかあいつは。

どうでもいいのだろうか、あいつにとっては。

意識しているのは私だけ。一ヶ月前に好きって言ったのも私の方から。

頷いてもらえてうれしくて舞い上がっていたけれども、実はあいつにとって私は、わりとどうでもいいのだろうか。

考えがイヤな方イヤな方に転がっていってひどく落ち込んだ。

まあそりゃ世の中の一般的な恋人からはかけ離れてるだろうさ。私たちって。でも好きなんだからしょうがないじゃな

いか。しかも付き合ってもいいと言ったのだから、責任をとってくれてもいいんじゃないか。
なんだかもう思考がぐるぐるしてくる。
悔しいのか悲しいのか寂しいのか腹立たしいのか。
たぶん全部だ。
だけど好き。

「記念日くらい大切にしてくれてもいいじゃんかー」

こんな調子で廊下の隅、膝を抱えてひたすらにのの字を書き続けていたら、芭蕉さんに見つかってものすごく心配された。
おなか痛いの大丈夫具合悪いごめんねごめんね、とひたすら謝り続けるものだから空元気でも出さないわけにはいかなくなって、休憩が終わり会議が始まってから、しまったあそこで具合悪いってことにしとけば私帰らせてもらえたんじゃないかってちょこっとだけ思った。
ちょこっとだけ思っただけでもちろん、そんなことしないけど。

「ほんと、今日はありがとう」
「いえいえ。それでは」

いつもの大学に一度帰って、芭蕉さんに挨拶をして、研究室を出たところですでに十時近かった。
てくてく階段を下りながらネクタイの結び目に指を引っかけて緩くする。
きちんとした格好で、ということだったのでスーツだが、さっさと家に帰ってジャージに着替えたい。

「……あーあ」

家に帰っても一人。
そう思ったらなんだか気持ちがくじけてきて、もう今日はカレー屋さんに行って帰ってシャワー浴びたらそのまま寝てしまおう。そんなことを考えて。

だから校門を出て街灯の下、ケータイを見てため息を吐き、顔を上げたときに目が合った瞬間。
あまりに驚いて思わず立ち止まって動けなくなって、ずいぶん長いこと見つめ合ってしまった気がした。

「……こんばんは」
「……こんばんは」

なんだこのよそよそしいやりとかツッコミはあったのだけれどももうそれどころではない。
ぺこりと軽く頭を下げて、妹子がこちらに歩いてくる。
なんかの術にでもかかったみたいに動けないままの私の前で、妹子が立ち止まって私の胸に白い四角い箱を突きつけた。
「差し入れにケーキたくさんもらったんです。僕じゃ食べきれないからあんたに押しつけようかと思って」

尖らされた唇が、耳まで真っ赤な顔が、不機嫌を表して有り余る眉とその間のしわが、もう言葉よりも何よりも正直で分かりやすすぎた。
何か信じられないことが起こっているみたいで脳内が完全に停止してしまっていた。
ひとまず押しつけられた箱を受け取る。
触れた指先がとんでもなく冷えきっていてどうしようもなくなった。
足下でした音はきっと私が鞄を落とした音。
さすがに受け取ったばかりのケーキを落とすわけにはいかないからそっちだけは死守して、もう何も考えられないままに、沸き上がった衝動に突き動かされて加減もできずに目の前の妹子を抱きしめた。
すり寄せた頬も冷たくってぴりぴり痛む。
ぎゅうぎゅうと手加減できなくて苦しくてもう、私はこんなに大きな感情の波をどうやり過ごしたらいいのか方法を知らない。

何なんですか苦しいですと怒って言うのに、背中に腕が回されてぎゅうと抱きつかれる。
この子は私をどうするつもりなのだろう。
もうこんなにもいっぱいいっぱいで、それなのにこれ以上どうするつもりなんだ。

「好き。好きだ。大好き」

一ヶ月前から変わらない。
本当はもっともっと前から変わらない。
伝えたいこと、抱え込んだもの。
こうやって少しずつでも吐き出していかないと壊れてしまいそう。

「……知ってます」

バーカ、という優しい罵倒を受け入れた。

「……嘘です。僕が買ってきました」
「だよね。お前嘘下手だもんな」
「るっせー」

妹子はポケットに手を突っ込んで、すねたように遠くを見たまま私の方は見ようともしない。
まあ、そういうとこ全部かわいいんだけど。
二人で並んで歩いていった。ケーキの箱は私が持つことになった。
二人で妹子の家に帰る途中だ。
「でもあんたの好みなんかわかんなかったから、いろいろ選んだら買いすぎた」
変なところで不器用で抜けている男なのだった。人のことをバカだ何だと言うくせに、こいつの方こそ変なところでバカで、バカみたいに優しいのだ。
思わずぶんぶんと、ケーキを持った方の手を振ってしまいそうになって我慢する。

私はずっと妹子ばかり見てたけど妹子は足下とかケータイとか見るばかりで全然私を見ない。
と思ったら、ちらりと私の方を見てぼそりと感想を言った。
「太子は、そういう格好してるとわりとまともに見えますね」
「お？　何々、惚れ直す？」
「……うっぜー」

妹子の口が悪くなるのも照れ隠しの不機嫌の証拠。
なんだかほわほわした心地でまたケーキを振り回しそうになって困った。
「ねえ、妹子私の鞄持ってくれたりしない？」
「は？　何で僕が」
「そうしたら私片手開くでしょ。そしたら手、つなげるよ」
「……調子にのるな」

ポケットから飛び出した妹子の手が軽く私の肩を叩いて鞄を奪っていった。
私は空いた手で妹子の手を捕まえた。
じわり、じわり、あったかいものが伝わってくる。
「相変わらず手汗がひどい……」
「な、ムードないこと言うなー！！」

「あんたのせいでしょう」

でも妹子はそのままでいてくれて、ぶらぶらとつないだ手を揺らして暗い夜道を二人で帰る。

「１２月２４日」

2009/12/24

「雨は夜更け過ぎに雪に変わると思うか？」
「無理だと思います」

夜、暗いとはいえ晴れていると良くわかる空を見て何をのたまっているのだろうか。ちらりと太子を横目で睨むと、だよなあ、とからから笑っていた。冬のこんな空みたいに。
隣を歩く太子は寒いのか、首を縮めてマフラーに口元を埋もれさせながら、本当はこういうこと全部クリスマスにやるのに、ていうか私仏教徒なのに、とか、なんだか今さらなことを言ってくる。
「じゃあ、やめますか？」
「ううん、やる」

僕は荷物を抱えなおして、太子側の手を空ける。
さてここからどうやってあの手を捕まえようかと、ポケットにつっこまれた太子の手をちらりと見たら、名案を思いつく前に太子の方から笑いかけられてしまった。
にやっと、少し腹立たしいように得意げな子供の顔だ。
「何だお芋。寒いんだろ、うらやましいんだろ。仕方がないからお邪魔させてやってもいいぞ」
「それでは遠慮なく」
「うおっ！？」

何をポケットひとつで偉そうに、と思ったが、手を突っ込んでみてすぐにわかった。こいつホッカイロしこんでやがる。
僕はじと目で太子を見る。
「変な声出さないでくださいよ」
「だって妹子がいつになく積極的……」
「寒いだけだ！」
なぜかしどろもどろの太子はいやだっていつもはまず文句を言うだのむしろ馬鹿にするだの無視するだの何だの、放っておけばずいぶんな言われようだ。
「じゃあ、いいですよ。お邪魔しました」

「あ、待てよ！」

ぎゅ、と手のひらを握られた。
せまい太子のポケットの中で、ホッカイロをはさんでだからむしろあついくらいになってくる。

「早くおうち帰ろうなー」

太子がうつむいていても、うれしそうだと言うことは簡単にわかった。足取りとか横顔とか言葉の調子とか。そんな太子の何もかもから。
ポケットの中で手をつないで、だから自然と体も近付く。

クリスマスイブの夕方過ぎ、寒空の下。買い物を終えた僕たちは急ぐでもなくのんびり歩く。
買い物をしてきた街の雰囲気もふわふわと浮ついた空気に包まれていた気もしたけれど、これは僕の主観の問題かもしれない。

しゃべるたびに口から漏れる息が白くても、耳が擦り切れるように痛くても、悪くないなと、そう素直に思えてしまう程度には、きっと僕も浮かれていたのだから。

クリスマスに恋人にプレゼントを贈るのは不自然ではないと思う。
それでもこの人とプレゼントを贈り合うと想像したら途端に萎えたのでそんなものは止めになった。太子はしたがったけど。
結局妥協案として、お互い同額ずつ出し合ってクリスマスツリーを買うことにした。
ツリーとは言っても大げさなものではない。机の上に飾れる程度の小さなものだ。
太子が選んだのはガラス製のツリーで、これに付属の球体の飾りを下げていくタイプだった。飾りもすべてガラスだ。太子によれば透き通ってるのがきれいでいい、とのこと。
僕の部屋に帰ってきて、まずしたことはコタツの上にこのツリーを飾ることだった。

「おお、なんだか急に、クリスマスっぽい！」

クリスマスが終わったら飾りは僕が、木は太子が持つことになった。来年まできちんととっておいてまた、飾る。

「だから絶対に失くすなよ？」

「誰に言ってるんですか。心配なのはあんたの方だ」

来年も一緒にいることが前提の約束も、疑う余地なんかなかったけど。

少しだけ照れくさかった僕はそんなことを言って、太子の方を見ないでごまかしてしまった。

晩ごはんはチキンとカレーだった。僕の家ではクリスマスにチキンを食べるのがお決まりだったからそれを踏襲しただけで、カレーはただ単に太子が好きなだけだ。作るのが楽だから困らないし。

コタツに潜り込んでもそもそと食べた。太子がチキンの油で汚れた手をコタツ布団で拭こうとするものだから一騒ぎあったりしたものの、おおむね穏やかな食事時だ。

テレビをつけてもどうせ大した番組はやっていないからと、レンタルショップで借りてきた映画を観た。

これを機会に、と気になる映画をあらかた借りてきたので、きっと明日もこうやってだらだら過ごすんだろうと簡単に想像できた。

「妹子、お代わり」

「はいはい」

きれいに空になった皿を受け取ってキッチンカウンターに戻る。

ごはんを盛りながら見れば、太子が肩近くまでコタツ布団にうずもれてぬくぬくと暖まっていた。

ご丁寧なことに冷蔵庫にはちゃんとケーキも用意されていたりする。わざわざ朝から作らされたのだった。料理ができるだなんて、言わない方が良かったんじゃないかって思う瞬間だ。

まあ嫌いじゃないし、むしろ趣味だし、楽しいからいいんだけど。

それよりも何よりも、この年で、ここまでクリスマスを満喫する事になるなんて思ってもみなかった。こっちの方が僕にとっては驚きで衝撃的だ。

ケーキはいつ出そうか。あとで太子に聞いておこうと思う。

カレーのお代わりを用意してコタツに戻った。

二人でごはんも終えてケーキも食べた。だらだら映画を最後まで見て、それが区切りになって順番に風呂に入る。
狭い僕の部屋はその分暖房のききも良く、きっと外は相当寒いんだろうなって思うけれどここは快適だ。コタツもあるし。むしろあったかすぎるくらい。
また別の映画を見ることにして、デッキに新しいDVDをつっこんでリモコンをいじる。机の上の透明なツリーの向こうで場面が展開されていく。
僕はコタツにつま先だけを入れて、ベッドを背もたれに膝を抱えた。それを見て、太子もコタツを出て隣に並んでくる。

「何ですか」
「だってこっちの方がテレビ正面じゃん」

結局コタツの電源は切ってしまって、ベッドからひっぺがした毛布を共有して膝にかけた。
太子はぼんやりテレビを見ながら、たまに側に置いたペットボトルのコーラを飲んでいる。
僕はそれを時々分けてもらいながら、画面を眺めながら全然違うことを考えていて。

午前中にケーキを焼かされて、昼間は太子の希望で買い物に出かけた。遅めの昼ごはん食べて、買い物したりぶらぶらしたりして最後にはイルミネーションまできちんと見てきた。
ずいぶんと自然に恋人同士だ。
驚くと同時にしみじみしてくる。
今年のクリスマスをこの人と過ごすことになるなんて、一年前の僕は知らなかったはずだ。
半年前の僕は予想くらいはしていたかもしれない。
一ヶ月前の僕なら確実に、予想ではなく期待だった。
僕はいつからこの人を意識し始めたのかなんて、明確な自覚がなかったから答えなんか出ないけど。

毛布の下、見えないところで手がつつかれる。
その指先を僕の方から捕まえたらあからさまにびくりと身を縮めるから、僕は呆れて太子を見た。
目が合う瞬間にいきなり飛びつかれて、そのまま後ろに押し倒されればさすがに驚く。
天井を背景に、せっぱ詰まったような顔を見たら文句なんか吹き飛んでしまってただ笑えた。思わず吹き出したら泣きそうな顔をするものだからもっと笑える。
どうせ肝心なところでためらう人だから。その臆病が僕は面倒でもどかしいから。だからもう少しも待たずに手をのばし、引き寄せてただ触れ合うだけのキスをした。
それだけの接触で、ぎゅう、と胸の奥にかすかな痛みがあ

って、そこからあたたかいものが広がっていく。
唇を離せば太子はなんだかぼんやりしていたので、僕はその肩を押し退けて起きあがり、先に進んでしまった映画を適当なところまで巻き戻しでまた見始めた。
ぼんやりしてた太子がようやくあわてた声を出す。

「え、ちょっと何その淡泊な反応！　私よりそんなに映画が大事か！？」
「ええ、わりと」
「さ、さすがにそれショックなんだけど……」
「今日はそういう気分ではないので」
「あそこまでしといてこの反応かよ！！」
「キスしただけでしょ。何ですかもう」
「うわあ！！」

とりあえずいきなり下半身に手を伸ばしてみたそこが、まあたぶん今触ったからなんだけど、緩く反応しかかっているのを確認して近い距離で目をのぞき込んで笑ってやる。
「どうしてもって言うんだったら抜いて差し上げてもいいですよ」
「……ッ、なんなのお前もういやだ！」
ば、と手を振り払われた。太子が一気に部屋の隅まで避難して、僕に背中を向けて膝を抱えいじけ始めた。微笑ましく見守ってしまう。
左手で膝を抱えて、右手でひたすらのの字を書いて。耳をすませば僕が優しくないだの意地悪だの変態だの何だの、失礼なことをぶつぶつ呟いていて。

「でも、好きなんですよね？」

背中に向かって訊いてみた。ちょっとだけ緊張した。あくまでもちょっと、だけだけど。
太子がぴくんと背筋を伸ばして、しばらく沈黙。映画の音だけしか聞こえてこない。太子ののの字を書く指先が止まっていた。
たっぷり時間をおいてから太子が振り返った。
恨みがましい目でじとりと肩越しに睨まれても怖くも何ともなかったけれど。

「そうだよ」

きちんと振り返って、膝立ちでにじりよられて。
手のひら一つ分くらいの距離を残して、伸びてきた手に頬を触れられて。

「ずっと、好きだったんだ」

してもいい、キス、だけでいいから。

真っ直ぐに見つめられてそんなことを言われて。
どうしてだろう、ぶわっと、きた。
一気に脳が沸騰した。
いつの間にか、顔が熱くてもう、どうしようもない。

「……いちいち聞くなって言ってんだろ」

舌打ちは口内に吸い込まれた。かみつくような勢いで唇をふさがれて、苦しいくらいに抱きつかれて。
このままどこまで正気を保ってられるかななんて、考えてもしょうがないことを思う。
映画はまた明日かなとか考えながら、加減なく抱きついてくる体を受け止めて、僕の方からもゆるく抱きしめ返した。

「１２月３０日」

2009/12/30

部屋のドアを開けた瞬間、盛大に顔がひきつるのが自分でわかった。

「太子、つかぬことをお聞きしますが」

「おーう。なんだ？」

背後でする脳天気な声が忌々しい。

「……これ、どこで寝るんですか？」

「え？　まさか、ここじゃ寝ないよ」

「は？」

「なんか寝る場所なくなっちゃって、だから最近ずっとソファーだけど」

「風邪ひくでしょう！？」

「大丈夫、エアコンつけっぱだから寒くないし」

ぎこちなく振り返ってやればやたらと得意げな男が腰に手を当ててふんぞり返って胸を張っていた。

「私ってば賢いだろう！」

「ふざけんな！！」

迷うことなく右ストレート。いつもながらの切れの良さに自分で満足。

太子はつぺんと滑って壁にぶち当たって崩れ落ちた。廊下に貼り付く。そんな太子を、怒鳴り散らしてやりたい気持ちなのだがまずなんて言ってやったらいいのかわからなくて持て余して、言葉に詰まりながらも人差し指を突きつける。

「だから、だっかっらっ！　喉を痛めるんだよ！！」

「ち、違うやい！　喉痛くないもん！　ただちょっと声がかすれちゃうだけだ！！」

「調子悪いんじゃねーか！」

太子を引きずってリビングまで引き返す。ああ、何でソファーに毛布が、って思ってたけどそういうわけか。アホめ。

もとから太子の家にはさほど期待していない。大掃除をするのに必要そうな道具はすべて持参している。使い慣れたものの方がやりやすいし。

持ち込んだ大量の荷物の中からマスクを引っ張りだして太

子につけてやる。その前にいつも持ち歩いているのど飴を口の中に放り込むことも忘れない。喉を暖めるためにここまで僕がしてきたマフラーもぐるぐるに巻き付けてとりあえず喉をカバーしてやった。

「妹子、苦しい」
「我慢してください」

それからまた、ずりずりと太子の部屋の前まで連れ戻して、意を決してドアを開けた。相変わらず広がっている物の山。いったいどうしたらこうまでなるのか。足の踏み場もないというのはこのことか。
僕は一度深々と、体の中身を空っぽにするくらいのため息をついて、うなだれたまま太子に言った。

「僕が、物を外に出しますので。とりあえず太子は片っ端から大事な物普段使うもの必要な物要らない物に分けてってください……後で僕も手伝いますんで」
「おお、任せとけ！」

絶対、だめだ。役に立たない。
確信して僕はもう一度ため息をついて、それから腕まくりをして気合いを入れた。
この目の前に広がる混沌を処理することが僕の使命だと、信じ込んでみればそこに生き甲斐を見いだせるかもしれないし。
やっぱり絶対無理そうなことを考えつつ、僕は部屋に足を踏み入れた。

「わーーーーーーー！！！！！！」
「何だ！？　……あ、妹子が埋まってる。写真撮ろう」
「ぶっつぶすぞ！！」

それでも人間、死ぬ気になれば何でもできるものだ。
と、僕は夜も遅くになってから、実感した。

「終わったなー……」
「……」

ふたりして疲れ果てて、リビングとかに移動する気力もなく、並んでベッドに寄りかかって床に直に座っていた。
部屋を見回して思う。よくぞここまで整頓した、と。
物があるべきところに収まっているというのは素晴らしい。僕は今日の僕の働きに拍手を送りたい。
廊下には雑巾だの掃除機だのなんだのが使われたまま放置されていて、そのうち片づけなければいけないんだけれど今は動けない。

「私の部屋ってこんな広かったんだなー」
「本当ですよ。僕の部屋よりもよっぽどいい部屋なんですから。きちんと使ってくださいよ」
「んー……」

太子は気のない返事で、ずりずりと背中を滑らせてのばした僕の足の上に頭を乗せてくる。

「重いです」

「いいじゃん。ケチ。ちょっとくらい」
「疲れてるんですよ」
「私もだよ」

まあ、最初は遊んでた太子も、僕の気迫におされたのか途中からかなり協力的だったし。そこはほめてやってもいいかもしれない。
……いややっぱりだめだろう。ここは、太子の家なのだから。自分でやるのは当然だろう。
むしろ僕がほめられるべきだ。
自分の部屋の大掃除を終えて、よしこれで気持ちよく年を越せる、と思ったところで太子から電話をもらって。
一仕事終えた後だって言うのに太子からのSOSに即座に対応しなおかつやり遂げて見せた僕はもっと評価されてもいいと思うがどうだろうか。
そんな僕の思いなんかおそらく太子は知らずに、ふとももの上でぐりぐりと頭を動かしてくる。

「うーん、そんなやわかくないな」
「なにを期待してるんですか、そんな、男の足に」
「筋肉お化けめ！」
「……いやいやいや」

手を伸ばして、指の間で髪をすくようにしてがしがしと太子の頭をなでてみた。

なんてことない、ちょっと構ってほしがっている犬のように見えたからだ。
すると太子はとたんに大人しくなって、静かに僕に頭をなでさせている。
わしわしとしばらく無心で髪を乱していたら、そっぽを向いた太子がふと呟く。

「広い部屋は苦手なんだよ。……さみしくて」
「……」

僕は反応しそこねる。さみしがりやの恋人に、何と言っていいのかを見失う。
何かを言うことは容易いだろう。優しい言葉、ただ甘いだけの言葉ならなおさらだ。羞恥心は盛大に生産されるだろうけど。
それを嘘にしないと言い切ることができない点で、僕はきっとこの人に優しくはないのだと思った。
誠実にいたいからこそ、安易な約束はすべきでないと、言葉は全部、勢いを無くしてこころの奥底に沈んでしまう。
無言でいる間に太子のかすかなため息が聞こえた。思い切りの悪い僕に愛想を尽かしたのだろうか。胸の奥が少し、軋む。
誤魔化すようにがしがしと、もっと乱暴に頭をなでた。

「明日は僕の家にくる約束でしょう。おいしいお蕎麦を作りますよ」
「……うん」
「……お風呂借りてってもいいですか。埃っぽくって」
「……泊まっていけばぁ？」
「ベット一つしかないじゃないですか」
「がんばりゃいっしょに寝れるだろ」

さみしがりやの恋人は、何て言ってほしいのだろう。
僕はきちんとわかっている気もする。
でも、こんな風にして、いつも誤魔化してしまっている気もする。
……嘘にするのが、怖いから。
嘘になるのが、怖いから。

「どうしよっかな……」

答えはもう決まっている。
わざともったいぶって悩むふりをして、僕はそっぽを向いたままの太子の髪をいじっていた。

「１２月３１日」

2009/12/31

食べ終えた蕎麦の器はそのまま、コタツの上に置きっぱなしになっていた。
片づけないと、なんて口では言いつつ、だらだらと僕も太子も動こうとしない。コタツの上には鍋もある。二人で今夜は鍋パーティだった。あと蕎麦と。
おなかいっぱい食べて、そのままコタツのあたたかさに捕まってしまえばもう動けない。
二人してごろごろしているうちに、気が付けばもう年越しだった。つけっぱなしにしたテレビから、最後の鐘の音とともに新年あけましておめでとうございます、なんて聞こえてくる。
「妹子ー、今年もよろしくー」
「よろしくおねがいします」

僕と太子はコタツを挟んで反対側、仰向けに寝転がってるから当然顔なんて見えやしない。
互いに顔を見ないまま挨拶した。ズボラだな、と思っていたら意外なことに、太子がコタツから出てきて僕のそばまでやってきた。
僕のすぐとなりにかがんで、何だろうと思っていたら頬にキスされた。僕は眠たくて目を閉じていた。おっくうだったけれどもどうにか瞼を持ち上げた。
「よろしくな」
キスを返すためには起きなくてはいけない。今体を起こすのは、眠たくてとても面倒だ。
代わりに、手を伸ばしてうりうりと頭をなでてみた。
「コタツ出たなら、ついでに食器類流しに運んどいてください……洗うのは明日僕やるから」
「……ええー？」
「水に浸しておくの忘れないで」
きっと文句言われると思った。けれど太子は予想に反して、
「まあ、仕方ないな！　たまには私もがんばってやろう！」
とかなんとか、偉ぶって気配が動いた。かちゃかちゃ食器

をならしながら足音がコタツ周りとキッチンの方を行き来する。
　食器を運ぶだけでなにを偉そうに、とか思いながら僕は眠たい。コタツの温度が気持ちいい。

「おーい」

　返事をする気も起きないくらい。

「何お芋、ねちゃったのか？　除夜の鐘は？　初日の出は？　初詣は？」

　鐘はもう鳴らし終わったに決まってる。なんだ、鳴らしに行きたかったなら早く言えば良かったのに。
　初詣も初日の出も面倒くさい。こんなにここはあたたかくて心地がいいのに、これを捨てて外にでるなんてバカじゃないか。
　眠たくて眠たくて僕は寝たふりを続けた。まだ眠りきってないけれど、眠たいのは本当だから。
　太子はしばらく僕を揺すったりしてたけれど、僕はひたすらに、今は寝ているんで静かにしてください、なんて心の中で繰り返していた。

「ふむ」

　あきらめたのか手が離される。僕は安心した。
　そして気が付いたら、いつの間にか唇がそっとふさがれていた。
　呼吸を吹き込まれて、ふれていた熱が離れていった。

「……奪っちゃったー」

　小声で、ささやき声で、弾む声で。
　パンダの CM を思い出した。よく似たぬいぐるみを、ゲームセンターで太子がほしいとごねていたのを思い出した。また今度挑戦してやってもいいかもしれない。でも今はこのまま寝てしまいたい、また今度……。意識がどんどんと沈み込んでいって物が考えられなくなっていく。
　ごそごそとコタツ布団が動いた。また太子もコタツに潜ったようだった。足先がコタツの中で少しぶつかった。

「おやすみ」

　ああもう、コタツで寝るなって言ってんだろいつも。風邪引くからって。……ああ、僕もか。
　本当にもうただ眠たくて眠たくて、そのままどろどろと夢とも現実ともつかない考えを巡らせながら、ぼんやりと手をつなぎたいなって思った。
　きっとのばしても手は届かないからコタツの中で、足の先っぽをぶつけて重ねて、それで我慢することにした。

おやすみなさい。
最後にそう、こころの中で呟いた。

「１月１日」

2010/01/01

朝、というか正しくは昼直前か。時計の針が真上でびっくりしたから。

起きたら声がかれていた。コタツで寝たのだから当たり前。のどの違和感に顔をしかめて、キッチンで水をいっぱいくんで飲み干すと生き返るような心地がした。コップをおいてほうと息をつく。

流しには食器が運ばれていて、水もきちんとかけてあった。カウンターの向こうのコタツを見れば、コタツから太子が生えていた。そこで気持ちよさそうに眠っている。

自分のためと、あとはおそらく同じ状態であろう太子のためにコップに水を用意してコタツに戻った。

「太子、朝ですよ」

別に何か予定があるわけでもなかったから無理に起こすこともない。けれども、一応声はかけておくことにした。

「太子？　寝てますか？」

コタツの上にコップを置く。太子の頭をまたぐようにして、向こうの耳のわきに手をついた。すーすーと、規則正しい寝息が聞こえる。

「たいし？」

呼んでも太子は反応しない。

だから寝ているのをいいことに、身を屈めて額にキスをした。

昨日の夢の仕返しのつもりだった。唇で触れるだけ、そのままでしばらくいて、ゆっくりと離れる。

「……何してんだ僕」

あっという間に我に返った。新年早々、一人で何をしているのだろう、僕は。

僕は背を向けて立ち上がろうとする。今日は正月なのだし雑煮でも作ろう。そう思って。

立ち上がる途中でいきなり腕を引かれて倒れた。驚く間もなく何かに抱き止められる。

何かなんて。そんなの一人に決まってる。

「あんた、起きて……っ」
「おはよう妹子」
上擦った声を飲み込んだ。舌をかみそうになったから。後ろから抱きすくめられて動けなくなる。いつの間にコタツから出たんだこいつは。抵抗しようとする腕が捕まった。
「妹子が起こしてくれたから、起きた」
さっきのキスのことだってわかって一気に顔が熱くなった。
「な、ば、バカか！」
かなり暴れて抵抗するけど抜け出せない。太子は離してくれなくて、鼻を首筋にすりよせられてくすぐったさに首をすくめた。けらけらと耳元で笑い声があがる。からかわれているとわかっていてもたってもいられなくなる。でたらめに腕を振り回して無理に腕から逃れた。
息が乱れて何も言えない。太子を睨みつけてもヘラヘラされるだけで。
「だって妹子がいるんだもん」
かすれた声が機嫌良さそうにそう言う。太子はコタツの上のコップに気付いて勝手に飲んだ。何となく手持ちぶさたになってしまって、水をあおる太子を見ていた。喉仏が上下するのを見て喉が渇いたと思った。コタツの上にはもう一つ僕の分のコップも置いてある。
太子がコップに口を付けたまま傾けるのを止めて、視線をちらりと僕の方に寄越してきた。
「どうした？　ぼけーっとして」
「……いや」
「もしかしてそのまま続きしてほしかった？」
水を飲みたいなと思って、なんとなくぼんやりしていた。そして不意に何を言われたか理解して、かっと頭の中まで真っ赤になるような気がした。
おお、焼き芋焼き芋、と太子が笑う。はやし立ててくる馬鹿の頭を思い切り叩いた。
調子にのるなと、そう言い捨ててキッチンに向かう。その後をのこのこと太子がついてくる。
「何するの？」
「雑煮を作るんですよ！」
「ああ、今日正月だもんな」
そうかそうかと口の中だけで呟いて、太子がうれしそうにする。

「あけましておめでとう」
「……おめでとうございます」
「てなわけで、今年もよろしくな！」

僕が何かを言う前に、太子はさっさと洗面所の方に消えてしまった。僕はひとり残されてため息をついて、まず冷蔵庫を開けて中身を確認する。必要な材料はきちんと買いおいてあった。冷蔵庫から出して並べて用意を始めた。

無意識に鼻歌なんか歌いそうになってあわてて飲み込む。おかしい、からかわれてムカついたはずなのに。気が付いてみればなんとなく、気持ちが浮かれていて困る。

「バカじゃないのか」

そうでも呟いていないと、際限無くあのバカを甘やかしてしまいそうだと思ってこっそり舌打ちをした。

「１月２日」

2010/01/02

昨日作った雑煮を今日も食べていた。餅はたくさんあるし、出汁だってまだまだ残っている。昨日たっぷり時間をかけて丁寧に作ったやつだ。毎年これを食べると、ああ正月だな、と実感する。

コタツで太子と雑煮を食べながら、適当に正月番組をつけっぱなしにしていた。大して興味もないくせに何となく見ている。もう少しすると駅伝が始まるから、そしたらそっちにチャンネルを変えるつもりではある。

「……おお、おもちうにょーん」

「……こぼすなよ」

餅で遊び始める太子を睨んで、僕は餅を前歯で噛みきった。近所の商店街で手でついたという餅をわざわざ買ってきただけあって、やはり市販の物より柔らかくておいしい。

食べ物がおいしいとうれしくなる。上手に作れると楽しいから、料理は好きだ。

「あー……暇だな」

「ですかね」

のびきった餅をどうにか口の中に詰め込んで、もぐもぐさせながら太子が言う。僕は雑煮に入れたなるとを食べている。

「暇だよ。やることないしな。あー……妹子、どっか行く？」

「初詣は明日ってことにしましたよね」

「……だよなー」

だらだらとするのは嫌いではない。さすがにコタツに住み着きすぎかなと思わなくもないけれど。

「じゃあ、食べたらカルタとかしますか？」

「持ってるの？」

「たぶん、探せばどこかに」

「……あれ、ふたりで？」

「僕が読むんで太子がとってください」

「ひとりで！？　そんな悲しいカルタがあるかい！」

「あ、駅伝」

ぶーぶーと不満げな太子も、コタツの中、足をつついてやれば不機嫌顔をくすぐったそうにゆるませて結局にやける。

「暇ですね」

「だな」

今日はこのまま、だらだらと一日を退屈に過ごす予定だった。

「１月３日」

2010/01/03

がらんがらんと太く組まれた紐を揺らして鈴を鳴らした。ぱんぱん。二礼二拍一礼の真ん中、手をたたく。

その手を合わせたままにして目を閉じた。念じたのは願い事やら抱負やら。一瞬でいろんなことを思って、結局収拾がつかなくてとにかくがんばりますのでよろしくお願いします、に落ち着いた。

締めの一礼してとなりを見れば、まだ太子が目を閉じて手を合わせていた。余りに真剣な様子に急かすのもためらわれて僕は待つことにした。

太子はその後もたっぷりと時間をかけてから、ようやく目を開けて丁寧にお辞儀をした。二人で横に避けて賽銭箱の前を後ろに譲った。

とんとんと、石段を下りながら聞いてみる。

「なにをあんなに真剣にお願いしていたんですか？」

「んー？　秘密。こういうのって人に言ったら駄目みたいだし」

「ふーん」

太子は足元ばかりを見ていた。僕も落ちないように足元を見る。石段は高くて狭く、上る以上に下りは怖い。無事に最後の段まで下りて、はあ、と太子が息を吐き出した。白いかたまりが薄くなりすぐに消えてしまった。

太子は両手をポケットに突っ込み、マフラーに口元まで埋もれさせて体をぶつけるようにしてくる。ひっついてこられると正直歩きづらいけど、特に文句は言わないでおいた。寒いのは、僕もいっしょだ。

神社の境内を抜ける途中、太子がおみくじひきたいというので列の最後について並んだ。しばらく順番を待って、太子だけじゃなくて僕もおみくじをひいた。

結果は二人とも吉。良いとも悪いとも言い切りづらい微妙さに二人して顔を見合わせ笑いあった。

「妹子といっしょだから、まあ、いっか」

おみくじはそのまま、神社の木の枝に結びつけてきた。

他にも境内にいくつか出ていた屋台を冷やかして歩いた。屋台ではたこ焼きとわたあめを買った。歩きながら太子がわたあめを食べていて僕にも分けてくれた。たこ焼きは全部で８個、僕と太子で半分ずつ食べた。食べながらぶらぶら歩い

て神社を出た。途中にあった手水舎の水を借りて太子に手を洗わせた。太子の手はわたあめとソースで汚れていたから。冷たいと嫌がった太子も最後には手を差し出して、大人しく僕に水をかけられていた。ハンカチを貸してやって手を拭かせる。

「約束だからな」
「子供じゃないんだから」

あきれたようにため息を吐いてから、冷えきって凍えそうな太子の手を掴んだ。小さく震えているのが少しだけかわいそうになって、そのまま僕のコートのポケットにつっこんだ。太子が見つめてくるけれども気にしない。そのまますたすたと歩きだせば当然、太子もついてくる。
冷えきった手はなかなか暖まらなかった。それでももう、寒いなんて、太子は文句を言わなかった。

僕らはそのまま駅に向かった。太子は切符で、僕は定期券で改札を通る。自然にまた手を繋ぎなおした。相変わらず太子の手は温かくなかったけど、凍えるほどでもなくなっていた。

人目が気になったけど、周りは誰もが忙しそうできっと僕らなんか意識しない。このままでかまわないだろう。
ホームにはもう新幹線が着いていた。太子に切符を見せてもらって、扉を探した。
出発時刻まであと7分。ぴったりなようなぎりぎりのような。余裕はあるようでないようで。
扉の前に立って、僕は太子に持っていた荷物を返した。

「こっちにはいつ頃帰ってきますか？」
「うーん、ちょっとわかんないなー。少なくとも一週間はずっとむこうだと思う」
「そうですか」

僕の顔を見て太子が笑った。

「予定決まったらすぐメールするさ」

さみしかったら電話してきてもいいんだぞというのは丁重にお断りをした。だってなんで僕からかけてやらなければいけないのか。

「でもまあ、太子がどうしてもさみしいというなら、電話してきてくれてもいいですよ」
「……お前」

そんなやりとりをしていたら発車のベルが鳴った。ドアが閉まる。向こう側で太子が手を振っている。僕はそれをずっと見ていた。

新幹線が動き出してようやく、ポケットから出した手を一度だけ、振った。

新幹線を見送る。空になったホームにしばらくたたずんで息を吐き出した。僕の息も白くかたまってすぐに溶けていく。

ポケットに手を突っ込んで階段を下りた。

ポケットの中で指先がケータイ電話に触れた。そういえばふと、年明けくらい帰ってこい、という手紙を実家からもらったことを思い出した。なんだかすっかり忘れていた。そんな自分にびっくりした。

僕も一度家に帰ろうかと思い立つ。ここから電車で2、3時間。近くはないけど遠くもない。いつも使っている電車をいくつか乗り継ぐだけで着いてしまう。

太子がこっちにしばらくは帰ってこないというなら、ちょうどいいかもしれなかった。

僕は階段を下りながら、ケータイを引っ張りだして電話をかけた。

「ああ、母さん？　僕だけど。……うん、そう、ちょっと明日からそっち行こうかと思って……」

うれしそうに怒った声が聞こえてくる。別にいいけど今まで何の連絡もしないであなた急に、とか、そこからいろいろとお小言が始まる。

「うん、ごめん」

何か手土産を用意しようか、だったら何がいいだろう。この間教えてもらった店のシュークリームとかいいかもしれない。おいしかったから。

「うん、うん……」

今頃太子はどのへんを移動中だろうか。

いろいろなことを考えながら、電話からの声に相づちをうって、僕は一人で改札口を抜けて駅を後にした。